

火の見櫓

作者：川崎ゆきお

概要：「火の見櫓に登ったと言うの」

火の見櫓

「貴司が、変なこと言うのよ」

「子供はみんな変なこと言うさ。大人から見ればね。いちいち驚いてちゃきりがない」

「火の見櫓に登ったと言うの」

喜一は妻に聞き返した。

「どうして、そんな言葉知ってるのかしら」

「火の見櫓なんて、最近見ないなあ」

「田舎へ行けばまだあるんじゃない」

「で、何で、貴司が火の見櫓なんだ？」

「塾に行かなかった言い訳よ」

「だから、何で火の見櫓なんだ？」

「塾に行く時、火の見櫓があったらしいの、それで登ったんだって」

「上までか？」

「あなたまで、変じゃない？ 火の見櫓なんてこの辺にあるわけないでしょ」

「マンションとかの非常階段かもしれないぞ。螺旋階段とか...」

「そんな高い建物、近くにないわよ」

「で、どこで見たんだ？」

「家の裏よ、前野さんの前」

「そこはモータープールがあるだけだろ」

「すぐにばれちゃうウソなんだけど、どうして火の見櫓なんでしょうね」

喜一ははっとなった。

「どうしたの？」

「あそこに火の見櫓や消防団の詰め所が昔あったんだよ」

「いつの話？」

「僕が貴司と同じ小学生のころだ」

「じゃ、うんと昔じゃない」

「貴司は親父から聞いたのかもしれないなあ」

「お爺ちゃんから？ でもどうして、それが見えるの？ あ、見えるだけじゃなく、登れるの？」

「登れないさ」

喜一は昔、登ろうとした。鉄塔に梯子がついていたが、最初の一段目は、子供では手が届かない位置にある。

喜一はロープを引っ掻け、一段目までよじ登ったが、そこから上へは怖くて登れなかった。

「貴司を呼んでくれ」

「塾よ」

喜一は庭から路地を抜け、火の見櫓のあった場所へ出た。

あらためて周囲を見ると、景色は一変している。当然だろう。平屋だった家が二階建てになっていたり、家の透き間は塀で仕切られている。

喜一は、上を見た。

火の見櫓が見えるのを期待して。